

社ニューガラスフォーラム 上松 敏明

昭和63年5月8日から22日まで、ニューガラスフォーラム訪欧調査団がヨーロッパ各地の研究機関等を訪問し、ニューガラス事情の調査を行った。

この調査結果については、いずれ正式の報告書が会員各位に届けられる筈であり、また、技術的な面については、先頃開催された総会の後の講演会で、大工試の寺井先生の報告をお聞きになった方も多いと思われる。

ここでは、訪問の経緯と個人的な感想を述べることでお許しをいただきたいと思う。

今回の調査団の目的は、ヨーロッパにおけるニューガラスの研究開発ならびに産業の実情を調べることにあつた訳だが、はからずも別の面からガラス産業の一端を垣間見ることになった。

ヨーロッパに調査団を派遣することは、昭和62年8月にニューガラスフォーラムが社団法人化された時からの計画であつた。当初は、63年秋を目標に調査団を派遣する計画であつたが、いろいろな事情を勘案して、5月に出発することが最も好都合との判断から、急拠実施計画を作成する必要に迫られ、昨年暮れから慌ただしく仕事にとりかかった。

今年1月半ば過ぎ、团长をお願いした安井先生を含めて二三の方々のお知恵を拝借して、訪問先の選定、先方への打診を始めた。

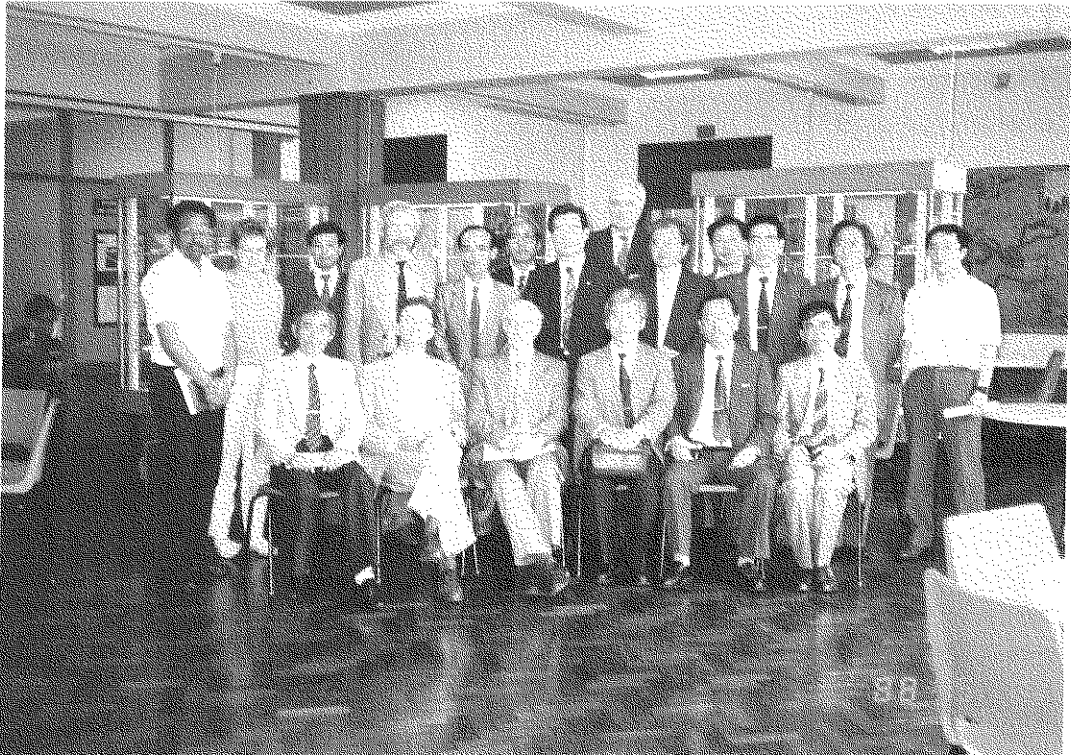
3月初めには、一部の訪問先未定のまま、会員に対し参加の呼び掛けを行った。スケジュールがほぼ固まったのは、3月末で、出発までに1カ月余を残すのみというきわどいタイミングであつた。

Society of Glass Technology (イギリス) の Spring Meetingに参加することにしたのは、そのシンポジウムの「2000年におけるガラスの役割」というタイトルが今回の調査にドンピシャリだったからである。しかし、その実態はどなたかが言っていた様に、「2000年にガラス産業（それは主としてガラス容器産業であるが）はいかに生き残るか」こそ相応しいタイトルであつたろう。

悲観論、楽観論が入り混じり、柔軟な対応が盛んに叫ばれていた。現場を見たわけではないから実情は分からないが、かなり落ち込んでいるのは事実と思われる。原因は、多分技術革新への対応の遅れであろう。

「なんとかしなければ……」という思いは強いようで、それは斬新な窯の設計を共同開発するプロジェクトの発表にも現れていた様に思われる。その窯は、斬新ではあつても、実用化の面からは、ちょっと首をかしげたくなる思いがしたが、しかし、あきらめるのではなく、公的機関を含めて「何とかしなければ」を実行に移してゆくしたたかさと、このような深刻と思える話をゆったりとした時の流れの中で討議している姿に異国を感じた。なお、このミーティングには、もう一つ「ガラスの強度」に関するシンポジウムが組まれていたが、こちらの方は小生は聴講していないので、正式報告に待ちたい。

イギリスは美しい国である。ロンドンではマロニエ (Chestnut) が咲きほこり、郊外には豊かな牧草場が広がり、その間に菜の花畠の鮮やかな黄色が目を楽しませてくれ、シェフィールドからハロゲートへかけて、なんと八重桜が満開であつた。



最初の訪問先 シェフィールド大学での記念撮影（前列左から2人目がお世話いただいたジェームス教授。1人おいて安井団長。後列右から2人目が筆者。）

最初の訪問地イギリスのシェフィールドと、最後の訪問地フランスのモンペリエで、それぞれ大学を訪問した。研究内容について判断することは、小生には難しいが、ニューガラスフォーラムが作成した「調査報告書」に記載しているニューガラスの各分野はすべて研究の対象になっているといっておきそうである。驚かされたのは、スポンサー付の研究が多かったことである。どちらの大学も6～7割はスポンサー付の研究のようである。スポンサーは国内企業のみならず、世界のいろいろな国々の名前があがっていた。また、これに伴って、世界各国からの留学生の多いことも目についた。大学は、ニューガラスの研究センターであると同時に、国際的な教育センターでもあるということであろう。

イタリアはのんびりした困らしい（内実はそうではないのかも知れないが）。ヴェネツィアは昨年引き続き2度目の訪問であるが、職人が生きて

いる町という思いがする。最近のイタリアの経済活性化の成功は、職人を上手に活用したお陰との説もある。

訪問したガラス試験所は、ニューガラスの研究に関しては、特にとりあげるほどのものはなさそうであるが、地場産業に密着した試験・研究に関しては確固たるものを持っているようである。何よりも明るい雰囲気印象に残った。また、国際ガラス会議が検討しているデータベースの構築は、この試験所のトゥッチ博士を中心に進められている。

ショット社（西ドイツ）は、さすがに世界のリーディング・メーカーたるに相応しい対応を見せてくれた。容器、光学ガラス、TVバルブの各製造工程の見学、多孔質ガラスのミニパイロットプラントの見学、その後で行われた技術交換会議、どれをとっても自信に溢れ、迫力が違うというのが正直な感想である。ショット社の訪問は、期待して



いた通り、今回の訪欧のハイライトとなった。

ドイツでは、スケジュールの関係で自由時間が全くなかったが、バスから眺めた森とライン川の美しさが目に残っている。

モンペリエでは、地中海の水に触ってきた。この道路は、なんとなく日本の道路を走っているような気がした。

最後に表敬訪問したl'Institut du Verre (パリ)は実に印象的であった。キザな言い方をすれば、没落した貴族の館を見たような気持ちであった(本当の貴族の館を見たことはないが)。高級マンションの1階に事務室・図書室があり、案内された2階には実験室がある。我々が訪問した時には1人の女性が分析を行っていた。彼女の案内で別室を見せてもらったが、古びた測定機器が整然と並んだその部屋は無人であった。

かつては数十人のスタッフを抱えていたという

同協会が、現在の姿になったのについてはいろいろの事情があったとは思いますが、外来者から見れば、時代に乗り遅れたものの姿といえるだろう。

ヨーロッパは、ガラスの世界で種々の変革を生んだ。今は息を潜めている様ではあるが、活性化は進みつつあるらしい。長い伝統に裏打ちされた科学技術のバックグラウンドを失った訳ではない様にも思われる。今後も注目し続ける必要があるだろう。

イギリスでは寒かったが、全体的には天候に恵まれた。傘は荷物になったままだった。誰も体の具合を悪くしなかったし、スリにも遇わなかった。幸いであった。

最後になったが、調査団に参加された方々のお名前を掲げておく。

団長 安井 至 東京大学

団員 (50音順)

浅原 慶之	HOYA㈱
新井 敦	佐々木硝子㈱
上松 敏明	(株)ニューガラスフォーラム
岡崎三喜男	セントラル硝子㈱
奥田 啓二	ミノルタカメラ㈱
折居 晃一	日東化学工業㈱
鈴木 由郎	旭硝子㈱
寺井 良平	大阪工業技術試験所
西野 敦	松下電器産業㈱
水島 英二	日本板硝子㈱
元重 正洋	住友金属工業㈱
和田 正道	日本電気硝子㈱